

「本が死ぬところ 暴力が生まれる」(パリー・サンダース著、杉本卓訳、新曜社刊)という四年前に邦訳が出た「本」はどのくらい読まれているのだろう。それはともかくとして、いま、「本」は死にかけている。流通、ゼネコン、不動産など巨大産業の不況の蔭に隠れて、出版界の苦境はあまり注目されないが、ひどいものだ。しかも、それが「構造的」と思える点が深刻だ。どの産業でも好、不況は付きものだ、という話のようには見えない。

だれもが知っている、有名な出版社の名が次々と「いよいよ危ない」という業界噂話的となり続けている。なかには自業自得、いつそつぶれてくれたほうがセイセイする、と個人的には思う社もないではない。が、そもそも言つておれないのは、活字離れ、読み書

本が死ぬところ・……筑紫哲也

風速計

世論調査で近年しきりに出現する「九〇%現象」(少年法改正に賛成ですか、イエス九一%といった具合に)、その延長線上の小泉内閣への一時の“お化け支持率”などは

手中にしてからは、「報復のための戦争はもちろんのこと戦争そのものを自衛権の行使以外はやつてはならない」という国際社会が長年かけて積み上げてきたルールはどこかに吹き飛んでしまった。いまや、テロリストが潜んでいる、かくまつてあるといふ疑惑されあれば、どの国を攻撃してもよい、という

（ただしこのタイトルは邦訳題）。そうでなくとも、9・11以降、世界は「暴力的」になつてゐる。この日及びそれ以後に起きていた

とは「文明の衝突」などではありえず、「文明の逆行」でしかないと私は言い続けてきたが、最大の「暴力」である国家による武力行使は、それ以前よりもおおっぴらに抑制なく罷り通るようになつた。アフガニスタン、パレスチナで既にそれが起き、世界の他の地域の名が次々とあけすけに取り沙汰されている。「テロリスト」という恰好の標的(口実)をメディアが運んでくる強烈な映像と音響である。たたらされる最大の変化は、私たち人間の「自己」が崩壊することだ——というのがサンダースの前掲書の主張だが、そういう時、世論もまた「暴力的」となる。

それと「本が死ぬ」とこと関係があるのか。私はある、と思う。こんな乱暴な話が国際世論でも許されるのは、人間がものを深く考えようとしなくなつたからだ。それよりも、世論を決めるのは、電子文字文化から電子文化に移行することによつても、メディアが運んでくる強烈な映像と音響である。

たたらされる最大の変化は、私たち人間の「自己」が崩壊することだ——というのがサンダースの前掲書の主張だが、そういう時、世論もまた「暴力的」となる。

世論調査で近年しきりに出現する「九〇%現象」(少年法改正に賛成ですか、イエス九一%といった具合に)、その延長線上の小泉内閣への一時の“お化け支持率”などは

手中にしてからは、「報復のための戦争はもちろんのこと戦争そのものを自衛権の行使以外はやつてはならない」という国際社会が長年かけて積み上げてきたルールはどこかに吹き飛んでしまった。いまや、テロリストが潜んでいる、かくまつてあるといふ疑惑されあれば、どの国を攻撃してもよい、という

（ただしこのタイトルは邦訳題）。そうでなくとも、9・11以降、世界は「暴力的」になつてゐる。この日及びそれ以後に起きていた